

2021年度春学期 日本事情1 浅野担当「日本の色彩」

第3回

かさねの色目 — 1000年前の配色図鑑

浅野 晃
関西大学総合情報学部



([1],[2], …は, テキストの文献番号です。)

1000年前の日本

1000年前の日本では


1000年前の日本は「平安時代」

現在の京都は「平安京」とよばれ, 政治・経済・文化の中心だった

日本を支配していたのは「**貴族**」

貴族 = 天皇に連なる特定の家系の人々

貴族は文化の担い手

「源氏物語」のような文学  や ファッション文化も生まれた

1000年前のファッション文化

当時の貴族の服装から、
色を組み合わせる「配色」🌈の文化が生まれた

季節や場面に応じた配色の手本が「かさねの色目」

世界初の配色図鑑？

日本の被服材料と衣装

反物(たんもの)

着物👘を売る「呉服店」

右のイラストで、
女性が手に持っているのが
「反物」

これを切って縫い合わせて、
着物を作る



[1]

反物は、なぜ数十センチ幅の帯状なのか？

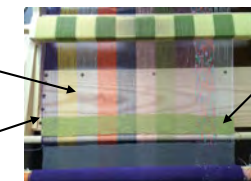
※なお、「三越」をはじめとして、日本の百貨店には、呉服店を発祥とするものが多い

反物はなぜ数十センチ幅なのか

布はどうやって織るのか

経糸(たていと)を
(写真の)上下方向に並べておき

そこへ緯糸(よこいと)を
左右に往復させて通す



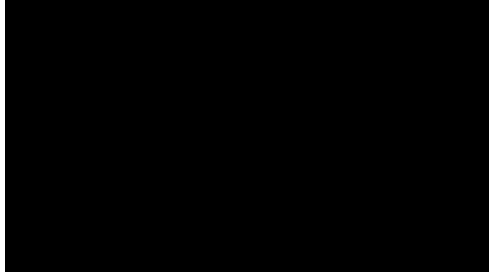
この部分が
布になっている

布を織る簡単な装置
(浅野ゼミ卒業研究で使用)

この手法では、作業者の前に経糸をならべて、
緯糸を両手で通すから、布の幅は限定される

動力織機の例

緯糸を「飛ばす」方法が発明されて動力織機が実現
→産業革命の始まり



スウェーデン・Göteborg市
"Göteborgs Remfabriks"
(織物工場の動態展示博物館)

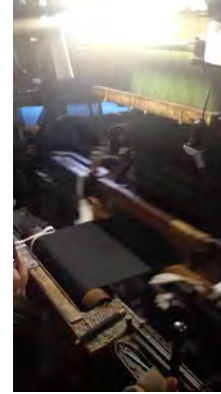
1930年代の布ベルト織機

左右に飛んでいる、緯糸を巻いた
糸巻きを杼(ひ, shuttle)という

現代の動力織機は、杼を使わず
緯糸を気流や水流で飛ばしている

動力織機の例

山形県米沢市の織物工場にて



ジャカード織機

↳は「紋紙」というパンチカード

緯糸が1回走るごとに、
それぞれの経糸を上げる／下げる
を指示し、織物の模様を作る
(プログラマブルな機械の始まり)

※トヨタ自動車🚗のはじまりは
自動織機です

反物で着物を作るには

この数十センチ幅の反物から

こういう
人の着るサイズの着物を作るには
どうすれば？



「直線裁ち」を用いる

胴体・袖・襟など着物の各部分を、ほぼすべて長方形だけで作り、
反物を無駄なく裁断する[2]

※着物は、着用後も各部分に分解して洗い、もう一度縫い直すことが可能。

直線裁ちのおかげで

着物は着用時に容易にサイズ調整ができる

祖母・母・娘と3世代にわたって
着られることも多い



私は、父の50年前のスーツを着ていますが…
(体型がそっくりなので)

十二単

五衣唐衣裳(十二単)

五衣唐衣裳
(いつつぎぬからぎぬも)

平安時代の貴族
女性の衣装

現代では
十二単(じゅうにひとえ)
と通称される

直線裁ちで作られている



[3]

五衣唐衣裳(十二単)

五衣唐衣裳(いつつぎぬからぎぬも)とは、

唐衣(からぎぬ) = 上半身の上着

裳(も) = 下半身の後ろの上着

五衣(いつつぎぬ) = 重ね着

何枚も重ね着するもののうち、
袷(うちき)を5枚重ねることから
「五衣」という



かさねの色目

直線裁ちで作られた、
長方形の衣服を
何枚も重ねたので

襟や
袖に
重ねた衣服の色が
順に現れる

これが「かさねの色目」



かさねの色目

やがて、
貴族の衣装においては

襟や袖の
「かさねの色目」を、
季節や場面に合わせて
美しく彩ることが
探求されていった



※後の時代には、より実用的な衣装が求められるようになり、五衣唐衣裳の肌着として用いられていた「小袖(こそで)」を表に着るようになった。これが現代の「着物」の原型

ところで、
1000年前の色がどんな色か、
どうしてわかるのですか？

平安時代の色を再現するには

1000年前の布でも、残っているものはある
奈良の正倉院(しょうそういん)には、
1250年前に大仏が作られた当時のものが保管されている

しかし

長い年月の間に色は変わってしまっているので、
当時の色はわからない

※毎年10月から11月に、正倉院に保管されている宝物を展示する
「正倉院展」が奈良で開かれます。ぜひ見に行ってみましょう

平安時代の色を再現するには

現代では

カラーディスプレイのように、
基本色を自由な割合で混ぜ合わせて、
さまざまな色を作ることができる

しかし、長い間

色は、植物・鉱物など自然の材料によって作られていた

※赤色のコチニール色素は、虫から作られています🐛

平安時代の色を再現するには

色は自然の材料から作られていたので

材料と製法が詳細にわかれば、
ある程度当時の色が再現可能

平安時代の宮廷の規則集である「延喜式(えんぎしき)」には、
衣装の色についての規則があり、
色を作るための材料と製法が詳細に書かれている

「かさねの色目」

「かさねの色目」

かさねの色目 =
層状に並んだ衣装の配色

「かさね」には、2つの字がある

「襲」…色の並び(写真)

「重」…濃い色の絹と薄い色の絹を
重ねたときの、濃い色が薄い色を
通して透けて見える色合い



定番の「かさねの色目」

さまざまな配色が研究され、
「定番」のものには名前がついて伝えられた

各種儀式といった「場面」

春夏秋冬の「季節」

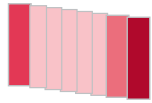
着る人の「年齢」によって、それに適した色目を用いることが、
洗練されたふるまいとされた

「かさねの色目」の例

春の色目の例[4]

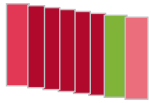
右が身体の外側(表側)の衣装,
左が内側の衣装

桜重 (さくらがさね)



紅 (くれなゐ)
赤花 (あかはな)の重ね
白の裏に
蘇芳 (すおう)
紅梅 (こうばい)

葡萄の衣 (えびぞめのきぬ)



紅 (くれなゐ)
蘇芳 (すおう)
萌黄 (もえぎ)
紅梅 (こうばい)

紫匂 (むらさきにおい)



紅 (くれなゐ)
紫 (むらさき)
紫 (むらさき)
紫 (むらさき)
黄 (わう)
萌黄 (もえぎ)

春といえば、梅や桜のピンク？若葉を示す萌黄(もえぎ)や紫も用いられていました。